

『分別と多感』

— マリアンのセンシビリティ —

金子 弥生

Sense and Sensibility

—Marianne's Sensibility—

Yayoi Kaneko

Abstract

Jane Austen's novels are novels of manners. They interrogate manners regarded as their norm in the society in which her characters live. In her first authentic novel, *Sense and Sensibility*, Elinor and Marianne Dashwood are the heroines. Marianne, who is, at first, very sensitive and acts based on her feelings and emotions, is very attractive though her manners are deplored by those around her. On the other hand, Elinor, who behaves herself based on her sense and contemporary conventions, is not so attractive compared with Marianne. In presenting these two characters, Austen seems neither to completely deny "sensitivity" nor to completely admire the "sense". She suggests that the important thing is to keep a balance between sense and sensitivity. In the course of the novel Marianne becomes more sensible; she adopts, that is, comportment which will win her praise from the public, but the reader cannot help feeling that she is less attractive than before. We must remember, though, that Marianne lives in a Novel of Manners and her existence is a necessary prelude to well-balanced heroines such as Elizabeth Bennet and Emma Woodhouse.

はじめに

ジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) は、サマセット・モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) の『世界十大小説』(*Ten Novels and Their Authors*, 1954) にも、F. R. リーヴィス (Frank Raymond Leavis, 1895-1978) の『偉大なる伝統』(*The Great Tradition*, 1948) にも、取り上げられている。彼女の作品は、イギリス初の小説『パメラ』(*Pamela, or Virtue Rewarded*, 1740) を書いたサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) の心理描写に、イギリス小説の父と言われるヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-54) の社会描写が加わり、一見単純と思われる世界に複雑な人間模様を描き出している。

リチャードソンを祖に持つイギリス小説は、「人間関係を中心とした市井の人の営みを主題とし、細部性・具象性・実証性を具えた噂話的性格が色濃い。」¹ 川本静子氏によれば、階級社会であるイギリスではそれぞれが属する階級が固定されているため、一人ひとりが階級にふさわしいマナーズで行動できるか否かでその人の評価が決まるという。つまり、個人のマナーズを巡る噂話が、現実認識の手段になり得る、というわけである。その上、日常生活の中でいかに生きるべきかを具体的に把握す

るイギリス人の傾向は、そのままイギリス小説にも反映され、その生活が描写されているのである。つまり、「現実をマナーズにおいて捉えようとする風俗小説こそ、イギリス小説正統派の伝統」と言えるだろう。²

オースティンが描写した18世紀後半は、“the Age of Sensibility”と呼ばれ、感情が重視された時代であった。洗練された人々は、同情心、感情移入が強く、すぐに涙を流すのが特徴であった。この“sensibility”をウォルター・アレン (Walter Allen) は、直感力、感覚器官の特殊な機能、つまり理解力および感情の鋭さであると説明し³、塩谷清人氏は内面、感情面を強調する語で、「本能、直観」、「繊細な感受性」と解説する。⁴ オースティンはセンシビリティ重視の傾向をパロディ化した習作を書き残し、過度のセンシビリティを批判している。⁵ 本格的な作品の第一作目となる『分別と多感』(Sense and Sensibility, 1811) は1795年から96年にかけて執筆されたといわれる『エリナーとマリアン』(Elinor and Marianne) を書き直したものであり、18世紀後半の感覚をもって執筆されていることは、そのタイトルからも理解できる。

“sense”には常識 (common sense) や健全な判断力という意味があり、分別を示していると考えられる。⁶ 換言すれば、センスとセンシビリティは対極に位置するということだ。本稿では、センシビリティを代表するマリアン・ダッシュウッド (Marianne Dashwood) が、センスを身につける過程を彼女のマナーズを通して考察する。

*

風俗小説を書いたオースティンの小説では、マナーズとは何を意味するのだろうか。川本氏の言を用いて説明したい。オースティンの小説では、個人個人が舞踏会、晩餐やパーティの席で、また家族、親類、友人たちの中での立居振舞いが問題になる。つまり、「時と場に応じて、また周囲の人々との関係において、個人が己れの位置を正しく認識して振舞っているか否か、そのマナーズの是非が絶えず問われている」ということだ。ここでのマナーズとは、「小説において人物を創り上げているもの一切」を指すと考えられよう。オースティンにとって、マナーズの是非を問うことは「エチケットの問題」ではなく、「エシックスの問題」、換言すればモラルの問題なのである。というのも、オースティンの描く人物のマナーズは、その「内的資質」つまりモラルを反映しているからである。⁷ 例えば『分別と多感』のロバート・フェラーズ (Robert Ferrars) の尊大さ、貪欲さ、うぬぼれの強さは、彼の目つき、話しぶり、立居振舞いに表れているということである。

さて、オースティンはジェントリー階級に焦点を当てて執筆しているが、この階級での各人物の振舞いには様々な約束事がある。例えば、未婚女性が積極的に参加する舞踏会での振舞いが自分の立場にふさわしいか否かは、その人物を判断する基準となるのである。

『分別と多感』のふたりの主人公、エリナー (Elinor Dashwood) とマリアンがいかに他人を評価するかを見る前に、まず彼女らの性格を一瞥したい。エリナーは一見冷静で常に平常心を維持しているように見えるが、実際は豊かな感情を秘めた女性として描かれている。“She [Elinor] has an excellent heart; —her disposition was affectionate, and her feelings were strong, but she knew how to govern them.”⁸ と述べられ、自分の感情を完全に抑制できる人物として登場する。この性格が、彼女自身にルーシー・スティール (Lucy Steele) との約束を守らせ、ルーシーとエドワード (Edward Ferrars) との秘密の婚約を妹にさえ口外しない。この完全な感情の抑制が、彼女を一

面的で個性に乏しい人物にする一因となっている。

エリナーと対照的なマリアンは、賢く感受性豊かだが、感情を抑制できず慎重さに欠ける。これは“*She was sensible and clever; …her sorrows, her joys, could have no moderation. She was generous, amiable, interesting: she was every thing but prudent.*” (7) という文章が示す通りである。慎重になることはなく、感情を抑制しない、つまり自らの感情に従って行動するマリアンの行為は、しばしばマナーズを逸脱し、世間の注目の的になる。一方、常に分別を働かせ、感情を抑制するエリナーは、常に常識的であり、マナーズにかなった立居振舞いをする。彼女がマリアンの保護者的存在となるのは当然であろう。また、地味な振舞いのエリナーは、マナーズに欠けるが派手なマリアンの引立て役を引き受けざるを得ない。⁹

父親の死後間もなく、ノーランド屋敷には腹違いの兄夫婦が乗り込んでくる。長子相続制により父親の財産は全て長男が相続するためなのだが、マリアンと母 (Mrs. Dashwood) はこの事実を受け止め、次に進むことができない。

The agony of grief which overpowered them [Marianne and Mrs. Dashwood] at first, was voluntarily renewed, was sought for, was created again and again. They gave themselves up wholly to their sorrow, seeking increase of wretchedness in every reflection that could afford it, and resolved against ever admitting consolation in future. (8)

ふたりの尋常ではない嘆き振りは、センシビリティ重視という時代風潮へのパロディであり、オースティンの習作、『愛と友情』(*Love and Freindship*) でのセンシビリティ過度の描写を想起させる。極端に強い感受性は滑稽でさえある。

次に対照的な性格の持ち主、エリナーとマリアンの人物判断法を比較したい。『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813) の主人公エリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) の人間分析法の1つに、「時と場に応じて自己の立場にふさわしいマナーズを示し得る人間とそうでない人間」という分類があるという。注意すべきは、このマナーズを示し得るか否かには判断する人物の価値判断が入ってくることである。¹⁰ そこで、エリザベスの人間分析法に従って、エリナーとマリアンのエドワードとウィロビー (Willoughby) に対する判断を見てみよう。

エドワードは最終的にエリナーと結ばれることになる内気でぱっとしない青年で、小説中、目立った活躍はない。エリナーは彼の誰もかなわない「分別と善良さ」とその優しい態度を評価、一方、ウィロビーの「周囲の人や状況を無視してなんでも思ったことを口にしすぎる」(58) 傾向を快く思っていない。マリアンは、容姿の悪さ、「情熱の輝き」の欠如でエドワードに対する評価は低く、一方彼女と同様、思ったことを口にする傾向、感じのよい振舞い、率直さと快活さでウィロビーを評価する。つまり、その場にふさわしいマナーズを示し得るか否かは、同一人物に対しても意見の分かれるところなのである。蛇足ながら、ダッシュウッド夫人は、自分たち家族をノーランドから一刻も早く追い出したいと思っている嫁のファニー・ダッシュウッド (Fanny Dashwood) のあからさまな態度を腹に据えかね、ファニーへの嫌悪感を日ごとに増していた。それが、“…to say that he [Edward] is unlike Fanny is enough.” (19) という夫人のことばが示すように、ファニーと似ていないと聞くや、彼女はたちまちエドワードはよい人、という評価を下す。つまり夫人はマリアン同様、感情で価値判断を行っているのである。

彼女たちの新居、バードン・コテージで出会うブランドン大佐 (Colonel Brandon) は、美男子ではないが思慮深そうな、物腰の紳士的な人物として登場する。しかし、17歳のマリアンに言わせれば、35歳過ぎの大佐は“an absolute old bachelor” (40) であり、リュウマチ病みで病気のことをこぼす、よぼよぼの老人でしかない。皆が騒いでマリアンのピアノ演奏を聴いていない中、大佐だけが静聴することで彼女に賛辞を送ったその態度には敬意を感じた。マリアンにもマナーズで人物を評価することはできる。しかしそれが全てではない。彼女の人物評価には第一印象が大きく影響している。

ブランドン大佐と好対照の印象をマリアンに与えたのが、ウィロビーである。雨の中、斜面で転倒したマリアンを抱きかかえて自宅に送った有無を言わせぬ男らしい態度に、彼女はすぐに参ってしまう。彼女が愛読する物語の主人公ぴったりのイメージのウィロビーは、まさに彼女の永遠の憧れの男性像そのものである。彼の「気品ある声とことば使い」や「並外れた美男子振り」はその魅力をますます高める。この出会いで、マリアンにはウィロビーしか目に入らなくなっているのである。

トニー・タナー (Tony Tanner) は、「印象とはデイビッド・ヒュームの哲学におけるキーワードの1つで、私たちの認識の源として重要な位置を占めるもの」と述べている。¹¹ 結果は明らかであろう。リュウマチ病みのよぼよぼ老人である独身男、ブランドン大佐と理想の男性像にぴったりのイメージの若くて美男子のウィロビーとでは、第一印象が違いすぎる。マリアンを捨て、金銭目当てで金持ちの女性と結婚したウィロビーが、申し開きのためにエリナーを訪ねる。彼の行いはマナーズに欠け、許しがたいものであり、エリナーはマリアンの受けた打撃を思うとほとんど憎悪を抱いたといっても過言ではない。それにもかかわらず、分別のあるエリナーが思わず彼に同情する場面がある。これはひとえに彼の「類まれな魅力的な容姿」と「率直で愛情のこもった快活な態度」のせいなのである。鈴木美津子氏は、ウィロビーに寛大なオースティンのこの態度は、約束事を重んじないウィリアム・ゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) に代表される急進的思想を、実は作者が支持していたことの証であると指摘する。¹² しかし、マナーズを重視してきたオースティンが急進的思想に共感するものであろうか。罪を重ねてきたウィロビーにある程度の幸福を用意したのは、急進的思想への共感というよりは、むしろ人間にとって第一印象の影響がいかに強いかを暗示していると思われる。彼は人当たりが良く、目を見張るほどの美男子で、話し方にも卒がない。誰にでも好印象を与える人物を見て、嫌悪感を抱く人はいない。だからこそ、一度は彼を勘当したスミス夫人も結局は彼を許し、家督を譲ったのであり、エリナーも憐憫の情を抱くことになるのである。

ウィロビーがマリアンと親密交際を繰り返しているとき、エリナーは彼からの距離を保つことで、そのマナーズを観察して客観的な判断を下すことができた。彼の美点を挙げたうえで、“a propensity… of saying too much what he thought on every occasion, without attention to persons or circumstances” (58) とし、周囲への配慮なしに思ったままを口にするという態度を非難する。彼のモラルにどこか問題がある証拠である。その後、彼のモラルの問題を彼の行動自体が証明することになる。

当時、舞踏会は適齢期の男女にとって、より多くの異性と知り合うための大切な場であった。そのため、同じパートナーと2回以上踊らないのが暗黙のルールだった。あえて同じパートナーと2回以上踊るのであれば、そのふたりは結婚を意識している証拠と見なされる。例えば、『高慢と偏見』で、ビングリー (Charles Bingley) がジェイン (Jane Bennet) に2回ダンスを申し込むのを目撃すると、

母親のベネット夫人 (Mrs. Bennet) はジェインの結婚を確信し、有頂天になってしまう。実際、ふたりの気持は結婚という方向に向いていた。マリアンとウィロビーの場合、2回以上、いやむしろお互い同士でしか踊らないという行為は、彼らの強い意思表示であり、当然、周囲の人々はあきれながらもふたりの結婚を確信する。ダッシュウッド夫人もふたりの結婚を期待するあまり、マナー違反の彼らの行為を咎めはしない。

エリナーはウィロビーの中に是認できる要素とできない要素を認めている。川本氏が指摘するように、マナーズには、実は「エチケットとしてのものとコンダクトとしてのもの」のふたつがある¹³。『高慢と偏見』のウィッカムがそうであったように、ウィロビーはエチケットにおいては申し分ないが、コンダクトには問題があったのである。つまり、彼の美しい顔、さわやかな声と話し方、感じのよい態度は彼のモラルを示すものではなかったのだ。

エリナーはマリアンに彼女の、そしてウィロビーの振舞いを注意するが、当然マリアンは姉の意見を意に介さない。なぜなら、マリアンは常にセンシビリティで物事を判断するからである。彼女にとって自分の感情及び考えをそのまま行動に移すことこそ、正しいマナーズなのである。彼女にとって非なるものは、自分の感情及び考えに合わないものなのだ。

… if there had been any real impropriety in what I did, I should have been sensible of it at the time, for we always know when we are acting wrong, and with such a conviction I could have had no pleasure. (80)

上記のマリアンのことばは彼女の信条を示している。悪いことは楽しくないこと、故に楽しいことは正しいこと、換言すれば、気持のままに行動することが正しいこと、という理屈である。こうしてコンダクトに問題のあるマリアンは、自分の行為を肯定してしまう。

自分のマナーズを肯定するマリアンの行為は、ますますエスカレートする。未婚の男女がふたりだけで散歩すべきでないとされていた時代に、ウィロビーとふたりだけで馬車で外出して、世間の批判を受けることになる。しかも馬車で彼女は、面識のない屋敷の女主人が在宅時にその屋敷の見学に行ったのである。“I would not go while Mrs. Smith was there, and with no other companion than Mr. Willoughby.” (80) とエリナーは妹の行動を非難するが、肝心のマリアンはなぜ非難されるのかを全く理解できない。この見学を彼女は大いに楽しんだのであり、楽しかったからには非難されるべき行為ではないのである。

ロンドン到着後、マリアンはすぐにウィロビーに手紙を書く。当時、男女間で手紙のやり取りができたのは、婚約している場合に限られていた。だからこそルーシーはエドワードから来た手紙を利用して、自分たちの婚約をエリナーに再認識させることができた。『高慢と偏見』で、ジェインが自分のロンドン滞在をミス・ビングリーに手紙で知らせたのは、婚約してもいないビングリー氏に手紙を書くことができなかつたからである。その結果、ミス・ビングリーは故意にジェインのロンドン滞在を兄に知らせず、ジェインと兄の再会を阻止することに成功した。また、『エマ』(Emma, 1815) では、やはり秘密に婚約を交わしていたフランク・チャーチル (Frank Churchill) とジェイン・フェアファックス (Jane Fairfax) は自分たちの文通を人に知られぬよう、十分に注意していた。他の作品の登場人物たちと比較しても、マリアンがウィロビーに手紙を書くという行為は、ふたりの婚約を物語っていると理解されるのは当然である。隠し事をしないマリアンが、自分の婚約について一言も話

をしないことに疑問を抱きながらもエリナーは、マリアンがウィロビーに手紙を書いたことでふたりの婚約を確信して安心する。今までの世間の批判を浴びて当然のふたりのマナーズも、婚約という事実がある程度の理由になるからである。しかし、ウィロビーからの返事は来ず、マリアンは落ち着きを失い、ほとんど話もしなくなってしまうのだった。

マリアンがウィロビーとの婚約を公表しなかったのには理由があった。恋人同然に振舞っていたふたりであったが、実際には婚約という事実はなかつただけでなく、愛を告白されたこともなかつたのである。マリアンは、“burning human heart”¹⁴ と称されるほどに情熱的であり、常にウィロビーに対する自分の気持に忠実であった。そのためにどう世間から非難されようと平気だった。他人から良く思われたいという気持は全く持ち合わせていないのが、マリアンのマリアンたる所以なのである。彼女の行動がマナーズに欠けるのは確かであるが、しかし、そこには何の計算もない。自らの気持に忠実であろうとする純粋さが彼女の特徴であり、同時に魅力でもありと言えよう。

マリアンと対照的に、他人の存在を常に気にするのが、ルーシー・スティールである。彼女は財産も十分な教養もなく、安定した生活を確保するためにエドワードをそそのかし、密かに婚約している抜け目ない女性として登場する。経済的に豊かな人々に取り入るために、心にもないことを平気で口にする。嘘に嘘で上塗りをするという大人社会で見られるパターンを繰り返すルーシーを、ダッシュウッド姉妹同様、読者は快く思わない。嘘をつけないマリアンに唯一できることは、婚約していないという事実を決して告白しないことだった。河合隼雄氏は「子供が大人になる時には、大人に知られてはならない秘密を持つことが絶対条件」¹⁵ と述べているが、告白しないこと、これがマリアンの「秘密」の形なのである。そしてその秘密が自分の弱点と関わる場合、秘密の存在は常に脅威として働くことになる。¹⁶ 婚約をしていないという事実を自分だけの胸に秘め、マリアンはふたりだけの幸福な時間を楽しみながらも不安感と戦っていたに相違ない。この自分だけの秘密をエリナーに告白したとき、彼女は大人への第一歩を踏み出したのである。

では、マリアンと共に世間の非難を浴びて当然のウィロビーはどうであろうか。様々な女性と問題を起こし、マリアンの愛情を弄んだだけでなく浪費癖の強い彼は、経済面を考慮して持参金5万ポンドの女性と結婚してしまった。世間知らずのマリアンとは異なり、彼は世間ずれした25歳の青年であり、マリアンと婚約しなかったのは、婚約しても自分にとって利点がないと考えたからなのだ。エリナーの“he [Willoughby] regrets what he has done. …Because he finds it has not answered towards himself. It has not made him happy.” (398) ということばからも明らかであろう。純粋に、情熱的にウィロビーを愛していたマリアンも、“My happiness never was his object.” (398) と認めざるを得ない。つまり、彼は、エリナーが言うように「自己中心的」(397) な人物であり、自分のためにならない場合、マナーズを平気で無視するような人物なのである。

ロンドンでマリアンから何度も手紙を受け取りながら返事を出さず、意に反して婚約者と共に出席した舞踏会で彼女に再会すると、なんとも冷たい手紙が送られてくる。マリアンに特別な気持を抱いたことはなかつたと記された手紙が、マリアンからの全ての手紙と、彼の求めに応じて渡した彼女の髪と共に送られてきたのである。手紙はその人物の心情を文字で示したものであり、オースティンは手紙を「人物判断の手がかりとなる重要なマナーズ」の1つと見なしている。¹⁷ つまり、ウィロビーのコンダクトはここで決定的なものとなり、人として信頼できない人物という評価を下さざるを得ない。それにもかかわらず、自分勝手な一連の行動を弁明しに来たウィロビーを、一瞬ではあるが、常

に冷静な、分別の人、エリナーが思わず許そうとしてしまったのである。これは彼の誠実さがそうさせたと言うよりは、前述のように彼のもつ類まれな美しい容姿と感じのよい物腰、誠実な話し振りといったエチケットのすばらしさのためである。自らの過ちを帳消しにしてしまうような身のこなしを身につけたウィロビーは、その後の作品においてプレイボーイとして名を馳せるウィッカムへと発展してゆくことになる。

帰路に着いたダッシュウッド姉妹は途中、クリーブランド屋敷に立ち寄るのだが、秘密を明らかにしたマリアンには大きな変化が生じることになる。彼女は自分の感情を抑制することも、ウィロビーの行動の意味を理解することもできずに苦悩する。彼女のこの感情の激しさが彼女自身に向かった結果、彼女は鬱状態に陥ってしまう。不眠や食欲不振から、彼女の命は危険に晒されるのである。さらに言えば、秘密を所持するということは、「私だけが知っている」ということであり、「私」という存在の独自性を意味する。秘密はアイデンティティの確立に強く関係しているのである。¹⁸ その秘密を失ったのである。アイデンティティを喪失したマリアンが生命の危機に瀕するのは当然であろう。だが、マリアンは再生を果たす。エリナーをはじめ、ブランドン大佐、ジェニングズ夫人（Mrs. Jennings）の必死の看護に支えられ再生したマリアンは、自分の無分別と他人に対する思いやりの欠如に気づき、すべては自らの心持が招いた悲劇であったと悟り、自ら “I saw that my own feeling had prepared my sufferings,” (391) と語れるようになる。自分の行動の過ちに気づくことでマリアンは、一度失いかけたアイデンティティを回復したのである。

再生したマリアンは、今まで欠けていた分別を身につけようと努力する。すっかり理性的になったマリアンは、ウィロビーへの思いを復活させることはない。あまりに分別がありすぎて、自由奔放な彼女の魅力がすっかり失われてしまった印象を受けるほどである。驚いたことに彼女は、母親を始めとする周囲の人々の期待に応える形で、嫌いではないにしろ好きではないブランドン大佐と結婚する。タナーはこのマリアンの姿勢に、死のイメージを読み取り、「そのまま死んでいたら自殺のようなものね。」という彼女の言葉を引用しながら、彼女を川に流れるオフィーリア（Ophelia）と重ね合わせて、マリアンが無意識の幸福を選び取ったと解釈する。¹⁹ つまり、ブランドン大佐との結婚は、アイデンティティの放棄のようなものであり、魅力的なマリアンは死んでしまったというのである。マドリック（Marvin Mudrick）は、オースティンがマリアンを「習慣という棺に埋葬した」と指摘する。²⁰ 確かに再生後のマリアンは、自分の気持ちに正直に好きなように人生を謳歌する魅力溢れる以前のマリアンではない。だが、この変化はセンシビリティに偏り過ぎていた彼女には、分別にも目を向け、大人として社会に踏み出すには必要なステップであったのである。

まとめ

オースティンは『分別と多感』で、ふたりのヒロインを配し、彼女らのマナーズを通してセンスとセンシビリティを描いて見せた。オースティンは、センシビリティを完全に否定しているわけでも、分別を完全に賞賛しているわけでもない。いかにセンスとセンシビリティのバランスを取るかが重要なのである。再生後のマリアンからは、確かに以前のように輝くばかりに自由奔放に振舞う女性の魅力が失われてしまった。その変わりようはあまりに極端であり、タナーが指摘するように、読者には納得できないものであった。だが、風俗小説という枠組みの中で生き抜くためには、これはマリアンにとって必要な変化でもあったのである。つまり、マリアンは再生により大人としてのアイデンティ

ティを獲得したと言えるだろう。

オースティンがセンスとセンシビリティのバランスの取れた魅力あるヒロイン像を創造する過程にある人物として、マリアンの存在は大きい。自ら犯した過ちから学ぶ苦悩は、エリザベス・ベネットやエマ・ウッドハウス (Emma Woodhouse) の誕生へと繋がってゆく。また、過ちを犯さないエリナーは、ファニー・プライス (Fanny Price), アン・エリオット (Anne Elliot) 誕生へとそれぞれ繋がる。マリアンとエリナーは円熟味を増すオースティン作品のヒロイン誕生にとって必要な存在であったのだ。つまり、『分別と多感』には、オースティンの本格的小説の第一作目であるが故に作者の試行錯誤の跡が見え、マリアンとエリナーは後に続く作品の対照的人物造型の原形となったといえるだろう。

本稿は昭和女子大学学長裁量費の助成を受けた研究である。

注

- 1 川本静子、『ジェイン・オースティンと娘たち—イギリス風俗小説論—』(東京: 研究社出版, 1984), 5.
- 2 *ibid.*, 5-6.
- 3 Walter Allen, *The English Novel*. (Harmondsworth: Penguin Books, 1954), 84-85. また、塩谷氏は“sensibility”は内面、感情面を強調する語で、「本能、直観」、「繊細は感受性」を包含する語と解説する。
- 4 塩谷清人、『ジェイン・オースティン入門』(東京: 北星堂書店, 1997), 108-09.
- 5 例えば習作 *Love and Freindship* [sic] はセンシビリティのパロディである。
- 6 *O. E. D.* 11. a 参照のこと。
- 7 川本静子, 18.
- 8 Jane Austen, *Sense and Sensibility*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), 7. 以下、本文からの引用はすべてこの版による。
- 9 塩谷清人, 107.
- 10 川本静子, 21.
- 11 Tony Tanner, *Jane Austen*. (Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan, 2007), 108.
- 12 鈴木美津子、『ジェイン・オースティンとその時代』(東京: 成美堂, 1995), 118-20.
- 13 川本静子, 31.
- 14 R. W. Chapman, *Jane Austen: Facts and Problems*. (Oxford: Oxford University Press, 1949), 193.
- 15 河合隼雄・松岡和子、『快読シェイクスピア』(東京: 新潮社, 1999), 17.
- 16 河合隼雄、『子どもの宇宙』(東京: 岩波書店, 1987), 52.
- 17 川本静子, 31.
- 18 『子どもの宇宙』, 48-49.
- 19 Tanner, 101.
- 20 Marvin Mudrick, *Jane Austen: Irony as Defense and Discovery*. (Princeton: Princeton University Press, 1952), 91.

(かねこ やよい 英語コミュニケーション学科)